第７１回　中部日本高等学校演劇大会　**生徒講評委員会講評文**

羽咋高校

「Letters」

２０１８．１２．２３　上演３

この劇は、鈴木と本田のラブレターを書くという宿題をきっかけに、それぞれが持つ恋心や友達を思いやる気持ちがゆっくりと交錯していく静かで温かい劇であった。

緞帳が上がって最初に目に入る演劇部の部室のセットは薄暗く、机に乱雑にものが置かれてあり、舞台上にそのまま部室があるかのように思えた。また、登場人物は３人だが人数よりも多い机があることで他にも部員がいることを示唆しており、より世界観がリアルになっていた。部屋の薄暗さは実際の部室に似通っていたが、キャストの表情が見えづらいという問題点もあった。また、ホワイトボードに書かれた文字も見えづらくなっていた。本田の内気な性格や小林のだらけた様子も我々の身近にいそうな人物で現実味があったが、制服にほとんど違いが見られなかったので、身に付けるものの色の違いなどでさらに個性が出せるのではないかと思う。

この劇は、鈴木が持つ佐々木への恋心と本田への優しい友情が繊細に描かれていたが、雪が降るシーンで舞台全体が深い青色に包まれたことで、鈴木の心情をより色濃く表現していたと思われる。雪が降ったらもう一緒にいられないという佐々木にも小林にも会えなくなった状況の中、佐々木への恋心を諦めて本田の恋心を応援することを決めた鈴木が「私がやったことは正しいと思い続けられる」よう未来の自分に願って書いた手紙を読んでいるところは観ていてとても切なかった。ピアノの音楽が流れていて相乗的に鈴木の心の切なさや美しさが増していたという意見もあった。一方で、音響での雰囲気づくりに依存しており、演技での表現力を掻き消しているという意見もあがっていた。

小林が鈴木に向けて別れの言葉を言うシーンでも照明によって登場人物の淡い感情が丁寧に表現されていた。サイドスポットで真横から小林の顔を照らすことで、鈴木を思う素直な温かさが表現されていて、照れ隠しの言葉を言う際に小林が体の向きを変えたことでサイドスポットの光が小林の顔に当たらなくなって、小林が感情を隠していることがよく窺えた。

また、細やかな間での心情表現がとてもリアルで我々演劇部員にとって身近に感じられる劇であったが、それぞれの登場人物が持つ愛情や友情は３人だからこそ持てるものであり、この３人の愛情や友情は非常に尊いものであったと感じさせられた。鈴木が感情的に演じていなかったため、ゆっくりと切なさが伝わってきて観客の心に温かいものが残った劇だったと思う。

羽咋高校の皆さん、お疲れ様でした。